

父親が子どもを預ける経験を通して得た保育所に対する思いの変容

ライフヒストリーに基づく検討

遠藤 晶

(四條畷学園短期大学)

I はじめに

保育所での子育て支援として、保護者の子育ての方法理解を援助することや母親から子どもを育てる際の悩みなどを聞くという方法が実践されてきている。しかし、その支援の内容の多くは、母親を対象とするものが多く、父親を視野に入れたものは少ないと思われる。保育所が子育て支援をしていくには、父親の支援の内容についても考慮していく必要があると考える。

本研究では子育てに積極的にかかわるようになった父親が語ったライフヒストリーをもとに、子育ての積極性のきっかけとなった保育所とのかかわりについて検討する。

II 方法

1. 対象とした父親について

父親は会社員。現在 43 歳。母親は教員。長女は父親が 27 歳（勤務 3 年目）のとき、次女は父親が 30 歳（勤務 6 年目）の時に誕生する。母親が 2 ヶ月の産休明けから母親の職場の近くにある家庭保育所に預ける生活が始まる。その後、保育所の送迎や行事に参加し、家庭でも子どもと積極的にかかわるが、それは当たり前前の生活であり、そうなったのは保育所に預けた経験が影響していると思っている。

2. 父親へのインタビュー

時系列の確認のため、写真、日記、当時の保育者との連絡ノートなどの記録を参考にしながら、保育所とのかかわりについて語ってもらい記録をとる。

3. 分析の仕方

インタビューの内容については、子どもを預けている生活の状況の変化に基づいて 4 つの時期に分類し、「子育てのための勤務状況」「子育ての状況」「他の保護者とのかかわり」「保育所に対する思い」「保育者とのかかわり」「自分を取り巻く社会とのかかわり」のテーマごとに整理した。

III 結果

1. 時系列にみる保育施設とのかかわり

第Ⅰ期 長女を家庭保育所（N市）に預ける

第Ⅱ期 長女を公立保育所（O市）に預ける

第Ⅲ期 長女公立保育所・次女認可外保育所（ともにO市）

第Ⅳ期 長女・次女ともに公立保育所（O市）

第Ⅰ期から第Ⅱ期にかけては子育てには一生懸命だったようだが、わからないことが多く子どもへのかかわり方も手さぐりでやっていた。この時期には預けに行く機会が少ないので、勝手がわからなかった。どのように熱を測ればよいのか、荷物をどのように片付ければよいのかなど、具体的な手順がわからなかった。

次女が長女と同じ保育所に入れなかったのも、やむなく認可外保育所に預けたのが第Ⅲ期であった。このときにフレックスタイム制度が導入され、送迎の時間も柔軟に取れるようになったところであった。週に 1 回程度の保育所に送って行くか、迎えに行くという程度の送迎であったが、保育所に預けに行くという抵抗感が少なくなったように思うと語られた。

2. 保育所の子どもや他の保護者とのかかわり

保育所にいくと、他の保護者の育児行動を観察することができた。人がしていることと、自分の行動を比較してしまうが、子どもと一緒にうまくかかわれているという自信のようなものが持てるようになった。第Ⅱ期のころ、毎朝送りにきていた父親もいたが、見ていだけでなかなか自分から声をかけることもできずにいた。長女が 4 歳児クラスになった第Ⅲ期には、自分の子ども以外の子どもが声をかけてくれ、一緒に遊ぶことができるようになった。帰りの支度も子どものペースを見ながらできるようになってきた。子どもから声をかけてくれるので、保育所に行く楽しみが増えていったようである。

3. 保育所や保育者とのかかわり

公立保育所に預けた第Ⅱ期ごろは保育所の建物に対する抵抗があり、父親が少ないので保育所に入っていくには勇気がいった。保育者から言葉をかけてもらって衣服の整理をするが、することがたくさんあって何度も失敗して恥ずかしかった。週末には布団を持ち帰ったりするが、大きな荷物を持ち帰ることへの抵抗は感じなかったようである。保育所生活に慣れた第Ⅲ期ごろになると、送迎の際に保育者から今日の出来事を聞くことが楽しみになってきて、以前のように保育者との会話の機会も増え、「お父さん」と呼ばれ声をかけられることが励みとなったようである。

4. 自分を取り巻く社会とのかかわりへの影響

会社の中では、子どもの送迎や通院のため早退する例が少なく、70人中2人がその立場であったとのことである。「子どもを保育所に預けている」ということが受け入れられていないわけではないが、同じような状況の人が少ないので、状況を説明するのに苦慮した。あらかじめ都合を伝え、仕事ができる時間を有効に使う努力をしたとのことである。会社では子育ては妻に任せているという感覚が強いような気がしていたとのことであった。

また、子どもや他の保護者とのその後の影響については、子どもが小学校・中学校へ進むようになって、保護者との関係は良好であるとのことである。子どもたちの卒業など節目を迎えたときに声をかけると、保護者が集まり成長した子どもの様子などを語り合う井戸端の集いが開かれるなど、インフォーマルなつながりが継続している。保護者にとっては子どもの成長に応じた悩みを話す機会となり、子どもにとっては学校集団とは異なる感覚で地域の中で仲間関係を確認する機会となっているようである。地域のなかで将来にわたるつながりを形成するのに、保育所でのかかわりが影響していたようである。

IV 考察

この父親が保育所に預けることに積極的になったのは、母親の代行的役割として預けていたのが、保育所も父親自身の責任であるという自覚、つまり「自己責任」が生まれてきたことが影響していると思われる。第Ⅲ期になり2人の子どもを同じ保育所に預けられず、母親の負担がそれまで以上に重くなったとき、子どもや妻からの期待に応えようとする「周りからの期待への応答性」、さらに、保育者、他の保護者、自分の子ども以外の子どもたちとのかかわりなど、それまでとは異なる社会的関係が生まれたように「良好な関係形成」が影響していると考えられる。これらは、保育所での保育者や保護者からの何気ない日常的会話や生活状況によって得られたものと考えられる。

事例に挙げた父親は、時間的制約の問題が緩和され保育所に預ける経験が可能になり、繰り返される保育の日常的行為に参加したことで、父親として自信を持つことが可能になった。父親にとっても、保育の中の日常的行為大切にしたい支援機能があることが示唆された。

	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	第Ⅳ期
預けた 保 育 施 設	長女・家庭保育所	長女・公保育所	長女・公保育所 次女・認可外保育所	長女・次女・公保育所
勤 務 状 況 と 子 育 て	子どもの病気、妻の勤務上必要なときに、有給を取得するが送迎することは不可能なことだと思っていた。		有給1日を4分割するシステムを利用して送迎	会社の勤務時間にフレックスタイムが導入され、送迎にかかりやすくなった。
子 育 て の 状 況	母親の職場の近くであったため、母親任せにならざるを得ない。	地域のつながりはなく時々公園で遊ぶ程度。	2箇所保育所生活で時間の余裕がなかったが、保育所にはよく行っていた。	保育所のことを知ると子どもと共通の話題を持つことができた。
他 の 保 護 者 と の か か わ り	関わる機会がない。	挨拶はするが、自分からは声をかけることはなかった。検温しながら、他の保護者が会話をしているが、聞いているだけであった。	保護者会の会長を自ら望んで務めるできるだけ保護者とのかかわりを持とうと、休日に近くの公園でバーベキューパーティーをするよう声をかける。たくさんの母親と知りあえただけでなく、父親の付き合いが広がった。	
保 育 所 に 対 す る 思 い	預けている実感はなかった	生活の場であるという実感がもてない。保育所のシステムがよくわからないので戸惑うことが多かった。衣服の調節の仕方も、家でやっているのと違って、覚えるのに時間がかかった。	次女が通う認可外保育所では、バザーの回数が多く休日はその活動に明け暮れた。時間的余裕はなかったが、他の保護者と会話ができるようになってきたので、子育てをしているという実感がもてるようになった。	保育所の行事にも参加する。仕事の時間をやりくりして、可能な限り行事に参加した。日常の送迎、懇談、子どもと一緒に遊ぶ時間など、行事は子どもを見るよい機会だととらえていた。
保 育 者 と の か か わ り	関わる機会がない	声をかけられると返事をする程度。	次女の認可外保育所で保護者会のリーダーになった。「お父さん」とよばれることがうれしい。	送迎のときに保育者から今日の連絡を聞くのが楽しみ。知り合いの先生がふえたのでいろいろな話が聞け、楽しんでいた
自 分 を 取 り 巻 く 社 会 と の か か わ り	妻が病気で仕事を休むときには、母子が実家に帰ってしまうので、仕事を休むことはなかった	会社と家庭が中心で、保育所の行事に参加する程度であった。	園への送迎を分担することが可能になる。会社で送迎をする社員が2名いたぐらいで、自分は送迎をするために早く帰ることになることを、周りの仲間に、あらかじめ伝えておいた。	会社だけでなく、地域でのかかわりが広がって行った。